図書館だより

目　次

巻頭言「家庭週報」明治編のデジタル化
——坂本　清恵　1
著作紹介　田中大介著『電車で怒られた！:「社会の縮図」としての鉄道マナー史』——田中　大介　2
著作紹介　塩崎尚美編著『実践に役立つ臨床心理学』第4版——塩崎　尚美　3
ケルムスコット・プレス版マインホルト著『魔女シドニア』
——川端　康雄　4
平安朝における日常の屏風，再現の試み
—大河ドラマ「光る君へ」の和歌考証を担当して—
——高野　晴代　6
2024年度夏期スクーリング開館について
——南木　香織　8

THE HOME WEEKLY, June 25th, 1904.
家庭週報

「家庭週報」創刊号

「家庭週報」明治編のデジタル化

坂本　清恵

今年は桜楓会120周年の記念年です。同会は，1901年に創立された本学が，初めて卒業生を送り出すに際し，卒業後も学び続け，社会貢献をするための基盤となる同窓会組織として創設されました。当時は女性が職業を持つことがなかなか難しかった時代であり，編集技能を身に着けられるようにと，成瀬仁蔵発案の「女子大学週報」が1904年３月１日に創刊され，第１回生卒業後の６月には，これを引き継ぐ「家庭週報」が，桜楓会機関紙として発行されました。その創刊時の編集人であった国文学部１回生の小橋三四子は，女性だけの手による編集の偉業をなし遂げ，そこで培った力を発揮して，「よみうり新聞婦人附録」編集主任や，『婦人週報』主幹，主婦之友社文化事業部の主宰など，38歳で早逝するまで，女性ジャーナリストの草分けとして大いに活躍しました。仕事を通し社会に貢献する女性を育成する伝統が，まさにここに形作られていたと言えるのです。

この「家庭週報」の明治編が，成瀬記念館から「デジタルアーカイブ」として公開されました。https://opac.jp.net/Opac/search.htm?s=ZVl 7OHxyjZI 8k 3svtSU 5DWnQHph&mc=off　卒業生の英知に触れることができる，大変に喜ばしいできごとです。これに先立ち，文学部日本文学科の渡部麻実教授の主導により，大学院生が参与して，「家庭週報」明治期総目次データベースが『日本女子大学紀要 文学部』73号（2023年）にまとめられました。図書館の学術情報リポジトリに公開されています。https://jwu.repo.nii.ac.jp/records/2000121

「家庭週報」の文芸作品発表の場である「文苑」には，短歌・俳句や詩が投稿され，家庭に関わる記事もありますが，それにとどまることはありませんでした。創刊時1904年には，時代が直面していた内外の動向，日露戦争の「戦報」や，国の政策にかかわる「雑報」，世界の状況を伝える「外報」など，多様な記事が満載されています。また，当時の「広告」にも興味深いものが見られます。明治編のデジタル公開により，今後，さまざまな方面から研究がなされることと思いますが，まずは総目次の作成とともに，同じ紀要に「明治期「家庭週報」という表現場」として，大学院生の論考が掲載されています。ご一読ください。

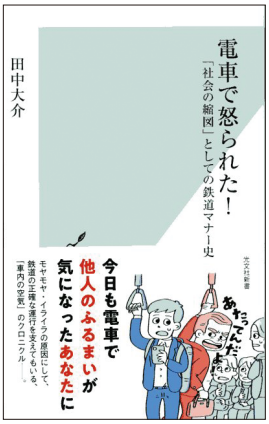
現在，政府から助成を受けた研究は，即時の公開が求められつつありますが，本学が開学以来刊行してきた刊行物などは，貴重な歴史的・文化的文献資料であり，そのデジタル化を行うことも，重要な事業であると感じています。

（図書館長・日本文学科教授）

著作紹介

田中大介著『電車で怒られた！:「社会の縮図」としての鉄道マナー史』

田中　大介



本書を書いているとき，いろいろなことを思い出していました。たとえば，まだ先生も同級生もほとんど来ていない早朝の教室でひとり過ごしたこと。高校３年生半ばくらいから満員電車に嫌気がさして，かなり早く家を出るようになったからです。座れるほどではなかった早朝の通学電車の喧騒のあとの静かな教室が清々しかったことを覚えています。

本学の在学生，卒業生のみなさんは，通勤通学でどんなことを経験・記憶されているでしょうか。大量の人びとが詰め込まれ，他人同士で規則正しく乗降することが求められる日本の満員電車はなかなかストレスフルですから，そのストレスを軽減し，トラブルを回避する各人各様のやりかたがあると思います。冒頭で紹介した行動は極端な時差通勤の一種といえるでしょう。いまはスマートフォンが普及しているので，ずいぶん楽に暇をつぶせるようになりましたが，歩きスマホや音声通話など，使い方によっては「迷惑」とみなされています。

そうした個々人の工夫や心理的な余白を振れ幅として残しながらも，他人同士で折り合える――いわばベン図の重なりにあたる――「共通部分」として，鉄道のマナーがあるといえるかもしれません。本書は，「共通部分」と考えられた「鉄道の規範」の100年にわたる持続と変化に関する社会学的分析です。鉄道の車内はしばしば「社会の縮図」といわれたように，結果として日本社会の歴史と現在を描くことになりました。車内の小さな振舞いから，日本の都市社会の構造と変容の大きな見取り図を得られる，というのが本書の特徴です。

筆者が女子大学に勤めていることもよい経験になりました。たとえば「痴漢」という問題が長く存在し，それに対応する「女性専用車両」が定着した日本社会では，女性の公共交通の利用には特有の困難が存在しています。女性は，性暴力に関するリスク回避とマナー維持を両立させるジレンマを背負わされてきたのです。そのことについては，本書の第５章で触れていますが，私も編著として加わった『ガールズ・アーバン・スタディーズ』（法律文化社）の第13章でより詳しい議論を展開しています。「都市経験は男性と女性で異なっているのではないか」ということにご興味をお持ちの方は，こちらもあわせてお読みいただけるととてもうれしいです。「女子大学と女性専用車両」という女性だけの空間は，とりわけ日本に多く存在しますが，そのことがもつ意味や意義もこれから考えてみたいテーマです。

女性の社会進出にともない，「サラリーマン」とよばれた男性たちが多かった通勤電車にも，多くの女性が乗降するようになりました。現在では「サラリーマン」ではなく，「ビジネスパーソン」等と表記されるようになっています。このプロセスで大きな社会問題として取り上げられたのが，痴漢でした。根絶には程遠いものの，以前より厳しく取り締まられるようになっています。さらに近年ではインバウンドの「観光客」の大きな荷物を電車内で見ることも多くなりました。都市型のオフィスワークに従事し，電車通勤する「労働移民」が大きく増えているわけではないものの，グローバル化によって日本社会の「多様性」が，さらに問われているといえます。

男性に加えて女性の乗客，そして日本人に加えて外国人の乗客の割合が増えていくとすれば，「社会の縮図」とよばれてきた電車のなかも変化していくでしょう。求められる規範意識も変わっていくかもしれません。本書がそうした議論を進めていくときのささやかな足掛かりのひとつになればとも思います。願わくば21世紀の公共空間においても，これまでの日本社会で培われた粘り強く，柔軟な調整が――単なる排除でない形で――発揮されんことを。　（現代社会学科教授）

2024年６月　光文社発行　341頁　＊図書館目白所蔵，請求記号686.5-Tan

著作紹介

塩﨑尚美編著『実践に役立つ臨床心理学』第４版

塩﨑　尚美

本書は，臨床心理学をこれから学ぼうとする人に向けて，臨床心理学の世界に入るための扉を開くきっかけとなることを目指して出版されました。臨床心理学というと，簡単に他者の心を理解できるようになるのではないかというイメージを持つ人が多いのですが，いざ本を手に取ってみると難解で，興味を失ってしまう人も少なくありません。心理学に興味を持って入学した心理学科の学生も，そのような事態に陥ってしまうことが多く，大学の教員になってから頭を悩ませてきました。いきなりフロイトやユングの本を読むことはとてもハードルが高いですが，フロイトやユング，ロジャーズのような臨床心理学の礎を築いた先人の理論に興味を持ち，もう少し学ぶために本を読んでみようというきっかけとなるような内容のテキストがあればいいのではないかと思うようになり，この本の企画を立てました。またテキストの構成を考える上でもう一つ重視したことは，理論と実践をつなぐことでした。古典的な理論を学んでも，それが実際の臨床にどのように生かされているのか具体的なイメージを持てないことが，学びを深める妨げになっていることを常に感じていたからです。

そこで本書は，第１部で，できるだけ平易に臨床心理学の古典的理論を学べるような内容にし，かつ，その理論が実践にどのように生かされているのかが分かるように，章の後半に実践例を入れる構成にしました。理論の概略を学んだ後にすぐに実践例に触れることで，理論が生きた学びとなれば，さらに学びたいという意欲を引き出せるのではないかと考えたからです。執筆は，豊富な臨床経験を持ちつつ大学で教育に携わっている知人達に依頼し，事前に打ち合わせを重ねて，私の出版意図を理解していただきました。

第２部は，心理専門職が実際に働く臨床現場を紹介し，その仕事内容を具体的に紹介する内容としました。本書の初版出版は2008年で，まだ国家資格である公認心理師がなかったのですが，臨床心理士としてそれぞれの職域で長く実践を続けて来られた方に執筆を依頼し，臨床心理士がそれぞれの現場で認められ，確かな地位を築くことができるように努力を重ね，創意工夫を凝らしてきたことが生き生きと伝わる内容にしていただきました。心理専門職の専門性とは何か，そのためにどのような学びや努力が必要なのかを読者に理解してもらい，第１部のような理論的学びがなぜ必要なのかを考えてもらいたいという意図もありました。古典的理論は，実践の中で生かすこともあれば，批判的に変化させなければならないこともありますが，批判するためにも学んでおくことが必要であることを理解し，学びにつながればと思ったからです。

お蔭様で本書は，本学だけでなく，他大学でも入門テキストとして使っていただき，版を重ねて，改訂をしてきました。第３版では，第２部の臨床実践に司法領域を加え，さらに2022年に第４版を出版するにあたり，構成を大幅に改訂し執筆者も交代しました。この改訂は，2016年に国家資格の公認心理師が誕生したことを受け，将来公認心理師を取得して心理専門職として働くための学びとなること考えて行いました。国家資格となっても基本的学びは変わらないですが，働く領域が法律にも明示されましたので，その内容に合わせて各領域の実践について執筆していただいています。また，社会の要請を受けて今後役割が重要となる児童福祉の領域を加えました。

本書は，心理系の大学生だけでなく，臨床心理学に興味を持ち学びたいと思っているすべての人にとって平易でわかりやすい内容になっています。多くの方に手に取っていただき，臨床心理学の扉を開くきっかけにしていただきたいと願っています。　（心理学科教授）

2022年９月　北樹出版発行　153頁　＊図書館目白所蔵，請求記号146-Jis

ケルムスコット・プレス版マインホルト著『魔女シドニア』

川端　康雄

ケルムスコット・プレス（以下，KP とも略記する）刊本は前号で取り上げた『トロイ物語集成』をはじめ，ウィリアム・モリスの愛読書を多く含むが，今回取り上げるヴィルヘルム・マインホルト（Johannes Wilhelm Meinhold，1797–1851）著『魔女シドニア』（KP19）もモリスが青年時に心惹かれた本の一冊である。ドイツ語で書かれたゴシック小説『修道院の魔女シドニア・フォン・ボルク』（*Sidonia von Bork*，*die Klosterhexe*）の刊行が1847年。それを「スペランザ」（Speranza）ことジェイン・フランセスカ・ワイルド卿夫人（Jane Francesca，Lady Wilde，1821–96）が英訳して1849年に刊行した。KP 本はこの1849年版を底本としている。

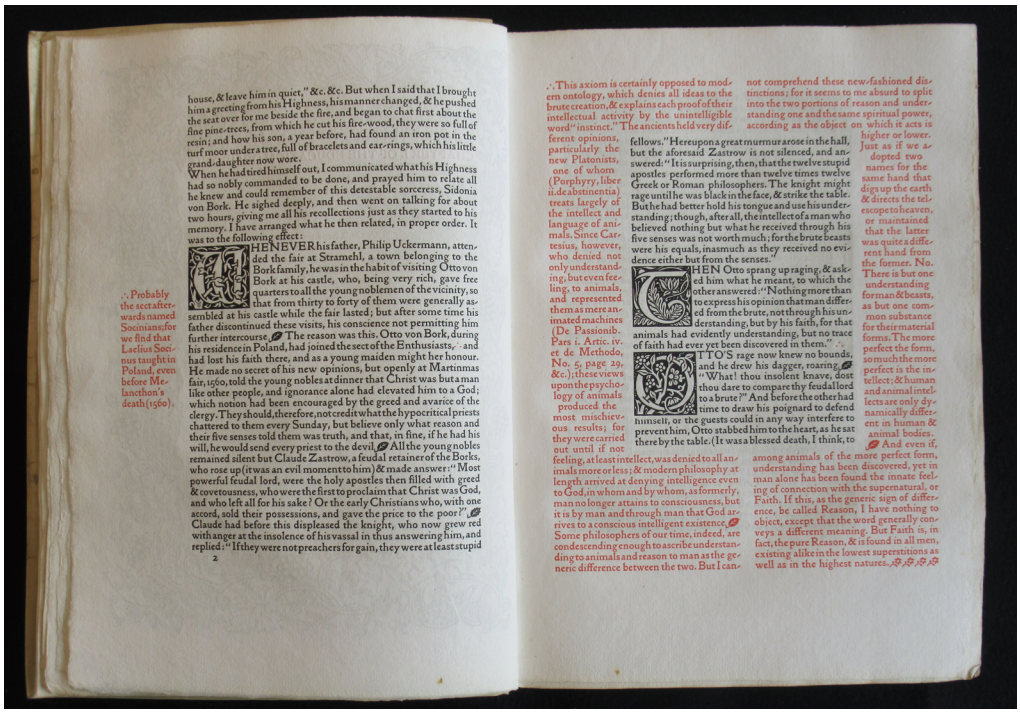
本書の刊行予告のチラシ（1893年10月頃発行）にモリスは次のような紹介文を書いている。

> ケルムスコット・プレスから近刊の『魔女シドニア』は，多少事実に基づいたひとつの歴史的ロマンスで，15世紀後半から16世紀前半にかけてヨーロッパ北部を悩ませた魔女熱を扱っている。著者のマインホルトはルター派の聖職者で，ポメラニア〔ポンメルン〕沖リューゲン島に住んでいた。上記期間についての自国の歴史と社会生活にあまりにも没入していたため，今〔19〕世紀前半という自身の時代よりも，むしろその時代に生きていた人物であったと言っても過言でないだろう。彼の生涯と文学的才能の産物が『琥珀の魔女』と『魔女シドニア』という２著で，いずれも――だが私見ではとりわけ『シドニア』のほうが――過去の暮らしをほぼ申し分なく再現したものである。これらは単なる古事物研究ではなく，しばしば悲劇の様相を呈した事件を表現しており，今日とは非常に異なる状況下であったとはいえ，その悲劇を演じる役者たちはじつに生気に富んでいる。要するに『シドニア』はこの種のものとしては傑作であり，他の追随を許さない。附言しておかねばならないが，ラファエル前派運動の初期にその派の芸術家たちのうちで文学志向が強い人たちが本書に夢中になった。バーン＝ジョーンズ氏の絵画展が今年の春に開かれた折に，二枚の美しい水彩画《シドニア》と《クララ・フォン・デヴィッツ〔ボルク〕》が一般の目にふれる機会となり，それらの主題は何であろうかと，多くの問いがなされたのだったが，この度の刊本がそれに十分に答えてくれることだろう。私たちはワイルド卿夫人の翻訳をとおしてマインホルトの非凡な才能を知ったのであり，これは良質で，簡潔で，共感に満ちた訳業である。

17世紀初頭にポンメルン公国において魔女裁判にかけられて焚刑に処されたシドニア・フォン・ボルケという女性がいて，彼女をモデルとして，失恋の恨みからポンメルン公爵家を滅亡させた魔女という伝説が出来上がり，脚色されていくつもの物語が書かれた。マインホルトの小説のシドニアは情欲が強い「ファム・ファタール」的な悪女として描かれており，多くの男を破滅させるのみならず，世話になった女性（クララ）さえも死に至らしめ，老いて修道院に入るがそこでも魔法を駆使して悪事の限りを尽くし，ついに魔女として告発・処刑される。

ワイルド卿夫人の英訳に最初に注目したのはＤ．Ｇ．ロセッティだったようで，彼を中心とした（モリスを含む）サークルで大いにもてはやされた。上記の引用でモリスが言及しているバーン＝ジョーンズの二枚の水彩画はこれに取材し，1860年に描かれたものだった。

KP 刊本での復刻版刊行の了解を訳者から得るためにモリスは訳者の息子であるオスカー・ワイルドに以下のように依頼の手紙を出している（1893年１月５日付）。「25年か30年前に私の仲間内で大いに愛読していた本の訳者がご母堂のワイルド卿夫人だと伺っています。いまなお非常によい本の非常によい翻訳だと思いますが，長いこと絶版になっています。そこでケルムスコット・プレスで少部数を（350部程度）印刷したいと考えております。ですが，ワイルド卿夫人からの許可を得ずしてこれを進めたりはしません。そこでお願いしたいのですが，私の要望を母君にお伝えいただき，この特権を賜るのにふさわしい謝金をいかほどにしたらよいか，お尋ねいただけないでしょうか。／ひとつ付け加えるべきこととして，誤植を別にして，あの本〔の本文〕をそのまま変えずに印刷することを提案いたします。初版から長い年月をへて変更を加えるのは嫌ですので」



house, & leave him in quiet," &c. &c. But when I said that I brought him a greeting from his Highness, his manner changed, & he pushed the seat over for me beside the fire, and began to chat first about the fine pine-trees, from which he cut his fire-wood, they were so full of resin; and how his son, a year before, had found an iron pot in the turf moor under a tree, full of bracelets and ear-rings, which his little grand-daughter now wore.

When he had tired himself out, I communicated what his Highness had so nobly commanded to be done, and prayed him to relate all he knew and could remember of this detestable sorceress, Sidonia von Bork. He sighed deeply, and then went on talking for about two hours, giving me all his recollections just as they started to his memory. I have arranged what he then related, in proper order. It was to the following effect:

∴ Probably the sect afterwards named Socinians; for we find that Laelius Socinus taught in Poland, even before Melanchton's death (1560).

WHENEVER his father, Philip Uckermann, attended the fair at Stramehl, a town belonging to the Bork family, he was in the habit of visiting Otto von Bork at his castle, who, being very rich, gave free quarters to all the young noblemen of the vicinity, so that from thirty to forty of them were generally assembled at his castle while the fair lasted; but after some time his father discontinued these visits, his conscience not permitting him further intercourse. ❧ The reason was this. Otto von Bork, during his residence in Poland, had joined the sect of the Enthusiasts, ∴ and had lost his faith there, and as a young maiden might her honour. He made no secret of his new opinions, but openly at Martinmas fair, 1560, told the young nobles at dinner that Christ was but a man like other people, and ignorance alone had elevated him to a God; which notion had been encouraged by the greed and avarice of the clergy. They should, therefore, not credit what the hypocritical priests chattered to them every Sunday, but believe only what reason and their five senses told them was truth, and that, in fine, if he had his will, he would send every priest to the devil. ❧ All the young nobles remained silent but Claude Zastrow, a feudal retainer of the Borks, who rose up (it was an evil moment to him) & made answer: "Most powerful feudal lord, were the holy apostles then filled with greed & covetousness, who were the first to proclaim that Christ was God, and who left all for his sake? Or the early Christians who, with one accord, sold their possessions, and gave the price to the poor?" ❧ Claude had before this displeased the knight, who now grew red with anger at the insolence of his vassal in thus answering him, and replied: "If they were not preachers for gain, they were at least stupid

2

∴ This axiom is certainly opposed to modern ontology, which denies all ideas to the brute creation, & explains each proof of their intellectual activity by the unintelligible word "instinct." The ancients held very different opinions, particularly the new Platonists, one of whom (Porphyry, liber ii. de abstinentia) treats largely of the intellect and language of animals. Since Cartesius, however, who denied not only understanding, but even feeling, to animals, and represented them as mere animated machines (De Passionib. Pars i. Artic. iv. et de Methodo, No. 5, page 29, &c.); these views upon the psychology of animals produced the most mischievous results; for they were carried out until if not feeling, at least intellect, was denied to all animals more or less; & modern philosophy at length arrived at denying intelligence even to God, in whom and by whom, as formerly, man no longer attains to consciousness, but it is by man and through man that God arrives to a conscious intelligent existence. ❧ Some philosophers of our time, indeed, are condescending enough to ascribe understanding to animals and reason to man as the generic difference between the two. But I cannot comprehend these new-fashioned distinctions; for it seems to me absurd to split into the two portions of reason and understanding one and the same spiritual power, according as the object on which it acts is higher or lower. Just as if we adopted two names for the same hand that digs up the earth & directs the telescope to heaven, or maintained that the latter was quite a different hand from the former. No. There is but one understanding for man & beasts, as but one common substance for their material forms. The more perfect the form, so much the more perfect is the intellect; & human and animal intellects are only dynamically different in human & animal bodies. ❧ And even if, among animals of the more perfect form, understanding has been discovered, yet in man alone has been found the innate feeling of connection with the supernatural, or Faith. If this, as the generic sign of difference, be called Reason, I have nothing to object, except that the word generally conveys a different meaning. But Faith is, in fact, the pure Reason, & is found in all men, existing alike in the lowest superstitions as well as in the highest natures. ❧ ❧ ❧ ❧

fellows." Hereupon a great murmur arose in the hall, but the aforesaid Zastrow is not silenced, and answered: "It is surprising, then, that the twelve stupid apostles performed more than twelve times twelve Greek or Roman philosophers. The knight might rage until he was black in the face, & strike the table. But he had better hold his tongue and use his understanding; though, after all, the intellect of a man who believed nothing but what he received through his five senses was not worth much; for the brute beasts were his equals, inasmuch as they received no evidence either but from the senses."

OTTO'S rage now knew no bounds, and he drew his dagger, roaring, ❧ "What! thou insolent knave, dost thou dare to compare thy feudal lord to a brute?" And before the other had time to draw his poignard to defend himself, or the guests could in any way interfere to prevent him, Otto stabbed him to the heart, as he sat there by the table. (It was a blessed death, I think, to

マインホルト著，ワイルド卿夫人訳『魔女シドニア』（ケルムスコット・プレス，1893年）。2－3頁。活字（ゴールデン・タイプ），装飾頭文字のデザインはウィリアム・モリスの手になる（所蔵：日本女子大学図書館）

『魔女シドニア』の書誌データは以下のとおり。

KP 書目第19番『魔女シドニア』（*Sidonia the Sorceress*）ヴィルヘルム・マインホルト著，フランセスカ・スペランザ・ワイルド卿夫人訳。大型４折判（287×205mm），472頁。ゴールデン・タイプ。２色刷。軟ヴェラム装，絹紐付。紙刷本300部（４ギニー）。ヴェラム刷本10部（20ギニー）。コロフォン日付1893年９月15日。KP より1893年11月１日発売。

本書が他の KP 刊本と大きく異なっているのは，傍注に加えて，黒の本文を囲むかたちで注が赤で印刷されているページがかなり含まれている点である。以前に本誌で取り上げた『聖処女マリア讃歌』（KP42番）がそうであるように，KP 刊本の形態が一様ではなく，版面構成においてもさまざまな試みがなされていたことを如実に示す例であると言えるだろう。

初版の誤植を訂正することを示唆しながらも，皮肉にもこの KP 版で新たな誤植が多く出てしまっていることに刊行後友人で出版者の F．S．エリスが気づいてモリスに詳細に指摘している。これは校閲の体制が不十分であったことに起因する。その後エリスが校正作業を手伝う機会が増えた。

本書には挿絵が附されていないが，当初オーブリー・ビアズリーに描かせる計画があった。1892年の春頃，美術批評家のエイマー・ヴァランスの推薦があって，この駆け出し（当時19歳）の挿絵画家に本書の口絵のための下絵を試しに描かせた。出来上がった素描を持参して彼はヴァランスと共にハマスミスのモリス邸を訪ねた。モリスは衣服（ドレイパリー）の襞の描写は認めたものの，その素描を（ヴァランスによれば大分激しい口調で）拒否した。これでビアズリーはモリスに恨みを抱くことになる。そのあと彼はデント社から依頼を受けて1893年から94年にかけてトマス・マロリー著『アーサー王の死』のオーナメントと挿絵を手がけるのだが，出来上がったのはケルムスコット本のデカダンス・パロディ版とでも称すべきものだった。これでモリスと KP への復讐を果たしたわけである。

なお，訳者のワイルド卿夫人には翻訳の使用料として25ポンドが支払われた。（文学部名誉教授）

平安朝における日常の屏風，再現の試み
―大河ドラマ「光る君へ」の和歌考証を担当して―

高野　晴代

紀貫之の名歌とされるものに次の歌がある。

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風さむみ千鳥鳴くなり

『拾遺集』冬に入集されたもので，「題知らず」すなわち詠歌事情が不明の歌という詞書を持つ。そこで『貫之集』を探れば，「おなじ六年（承平六年）春，左衛門督殿（実頼）屏風歌　冬」とあり，屏風の歌として作られたものであったと考えられる。「思いに堪えかねて，恋人のもとに行くと，冬の夜の川風が寒々と感じられ，千鳥の声もわびしそうに聞こえてくる。」といった心境であろうか。賀の席で，祝意を表した歌が書かれた屏風の歌ではなく，日々過ごしている部屋に置かれた屏風に書かれた歌なのであろう。

そうした日常の屏風を作成したい，という要望があったのは，昨年の６月のことであり，和歌考証の仕事は，こうした和歌に関わる調度等も範囲であった。今回は，『蜻蛉日記』を著した藤原道綱母（「光る君へ」では藤原寧子）の家に置かれた屏風の作成がミッションである。当時の寝殿造の邸にあったであろう屏風の姿の再現の試みと言える。

大河ドラマ「光る君へ」（NHK）番組公式ホームページ記事
「をしへて！ 高野晴代さん　～当時を再現！ 和歌の貼られた屏風」
2024年２月18日公開　より

その試みは，私自身，大きな期待を持って進める仕事でもあった。もう50年程前になる私の卒業論文の対象は，紀貫之であり，なかでもこの屏風歌を扱ったものだった。たとえば貫之の私家集の伝本の一つには九百首程の歌が収められている。貫之歌の全貌を知るべく，私家集を巻頭から読み進めることにしたところ，巻頭より五百首程が屏風に書かれた絵と共に享受されるものとして詠まれた屏風の歌であった。『古今集』の時代には，算賀の祝いのような公的に使用される屏風のための歌が要請されていたことがよく分かる。さらに気づくのは，居室に置く屏風の歌も多く収載されていることであった。その折にどのような歌が，どのような絵とともに，どのような形態で享受されているかを調査したが，残念ながら屏風自体は残ることはなく，屏風は消耗品であり，おそらく火災での消失が多かったと考えられる。

当時の屏風を推定させるものとしては，時代は中世にまで下るが，京都・神護寺に伝わる日本最古のやまと絵屏風である国宝「山水屏風」（せんずいびょうぶ）がある。和歌を記す色紙形（しきしがた）という区画が上部に設けられている。「山水屏風」の色紙は，屏風の一扇おきに貼られており，１首ないし２首の歌が書かれていたかと類推される。

また『源氏物語』が成立して，100年後に作られたとされる国宝『源氏物語絵巻』の中にも，色紙形が描かれている。国宝『源氏物語絵巻』の夕霧巻には，当時の屏風や障子絵を彷彿とされるものがある。夕霧が持っている手紙を取り上げようとする雲居雁の後ろにある屏風は，普通屏風は６扇であるので，５扇までが見えている。扇は曲とも呼び，６曲で一つの屏風になっている。ここでは歌が貼られたかどうかは不明である。絵巻の右下に女房二人が居り，その前にあるのは襖である。襖（ふすま）障子と呼ばれ（いわゆる襖，現在の障子は，あかり障子），ここでは，その上部に色紙が２枚貼られ，歌が書かれていた可能性がある。

ここで，重要な点を指摘しておきたい。たとえば『源氏物語』の屏風と当時の屏風絵とそれに伴う屏風歌は相違するものという点である。室町時代の後期の制作と推定される浄土寺の「源氏物語絵扇面散屏風」は，60枚の『源氏物語』場面を描いた扇面を，ほぼ四季の順に張りつけ，土佐派の絵師によって描かれたとされるものである。この扇面のようなものを貼り付けた屏風は，『源氏物語』享受としての一作品であり，平安朝の屏風ではないことである。

今回作成する屏風のどこに色紙形を貼付することにするかが重要な点であるが，神護寺の「山水屏風」から類推すると，例えば屏風に描かれた小さな登場人物がともに語らうような歌を，屏風の上部に設けた色紙形に書いたと思われる。

本稿冒頭に，貫之の「おもひかね」の歌を記したが，川辺を歩く人に託した和歌が，その絵の上部に書かれるという場面も想像できる。また，人が語らう場面において，『貫之集』の屏風歌からあげてみると，旅立ちに際し，送る人と旅立つ人の会話があり，それもまた，絵の上部の色紙形に書かれて貼付された可能性が指摘できよう。

旅出立ちする所に，ある女ども別れ惜しめる

惜しみつつ分るる人を見る時は我が涙さへとまらざりけり

出立つ人の返し

思ふ人とどめて遠く別るれば心行くとも我が思はなくに

また，恋の贈答では，次のようなものがある。「年月」というキイワードを用いての贈答が示されている。

男，女の家にいたりてとぶらひたる

草も木もありとは見れど吹く風に君が年月いかがとぞ思ふ

返し，女

桜花かつ散りながら年月は我が身にのみぞつもるべらなる

さらに，次のような歌もある。

男なき家

かけて思ふ人もなけれど夕されば面影たえぬ玉かづらかな

この歌は，『伊勢物語』の「人はいさ思ひやすらん玉かづら面影にのみいとど見えつつ」を引歌にして，「私には思ってくれる人もいない。男が面影に立つはずはないのだけれど，夕方になると，あの人の面影がいつも見える」という意の歌が詠まれている。

寝殿造りの家は，広い空間を屏風や几帳（きちょう）などの調度で仕切って場所を作り，生活している。このため屏風は，生活必需品の一つである。そうした屏風に貼付される歌を，貴族の家では，専門の歌人に依頼したことも多いと思われる。美しく描かれた自然と歌とのあわいから醸し出される世界を家の中で楽しんでいたことが想像できる。

加えて，平安朝に於いて，歌が詠めなければ，求婚もできないこと，そのためには『古今集』の歌々を覚え，『伊勢物語』を理解しておかなければコミュニケーションが取れないことなど，そして，どうしても歌が詠めない人の場合，歌を代わりに詠んでくれる代筆業があったかもしれないことなどをドラマ「光る君へ」が描くとき，こうした日常の屏風に課されたもののかなりの大きさを考えるのは私だけではないと思われる。この屏風が，人々の生活の中に和歌を自然と入り込ませ，あるいは，贈答歌を含め，和歌を学べるツールとしての目的を持つ調度でもあったのではないか。和歌が日常に溶け込んだ当時の姿を，平安朝における日常の屏風，再現の試みを通して，みなさまにご覧いただけることを，意義あることと思う次第である。

（文学部名誉教授）

◆大河ドラマ「光る君へ」（NHK）番組公式ホームページも是非ご覧ください。

◇神護寺所蔵・国宝「山水屏風」や五島美術館所蔵・国宝『源氏物語絵巻』夕霧巻が掲載された書籍を日本女子大学図書館では複数所蔵しています。是非ご利用ください。

2024年度夏期スクーリング開館について

2024年度は，７月29日（月）～８月３日（土）は遠隔授業，８月５日（月）～８月24日（土）は対面授業で夏期スクーリングが実施された。今年は連日記録的な暑さとなり，８月16日（金）には台風７号接近の影響により夏期スクーリング授業は休講，図書館も終日休館となった。そのため夏期スクーリング開館は23日間，７月29日・30日は通学課程定期試験最終日であったため21：00閉館となったが，その他の日程は平日8：45～20：00，土8：45～18：00の開館時間であった。利用時間帯としては開館から最終時限終了まではまばらであり，最終時限終了後に利用が集中する様子であった。今後もこの傾向が続くと思われる。

夏期スクーリング開館の利用状況

年度	2024	2023	2022
開　館　日　数	23	27	24
入　館　者　数	2773	2638	2,021
１日平均	120.6	97.7	84.2
最　　高	494	201	164
最　　低	54	54	28
受　講　者　数	1653	1945	1,814
登　録　者　数	86	102	131
１日平均	3.8	3.8	5.5
更新者数	64	63	65
来館率	9.1	8.5	10.8
貸出冊数（通信生）	361	247	346
１日平均	15.7	9.2	14.5
最　　高	52	23	45
最　　低	0	0	0
内郵送貸出冊数		0	0
1日平均		0	0
最高		0	0
最低		0	0
貸　出　日　数	23	27	24
複　写　枚　数	3013	3269	3,239
１日平均	131	121.1	135
一般学生・教職員その他の貸出	1239	1,174	1,103
１日平均	53.9	43.5	46
内郵送貸出冊数	11	6	42
1日平均	0.5	0.3	1.8

注：2023年度はスクーリング初日が通学課程定期試験最終日であり，21時閉館であったことが，最高入館者数に影響した。

参考係利用状況（質問処理件数）

年度（日数）	2024(23)	2023(27)	2022(24)
一般学生・教職員	15	38	32
スクーリング生・その他	14	23	18
合　計	29	61	50
１日平均	1.3	2.3	2.1

夏期スクーリング開始前から，テキスト類の図書館所蔵に関しての問合せが複数あり，熱意が感じられるスタートとなったが，図書館では１冊しか所蔵がないため，テキストはお早めにご準備をお願いしたい。今年の質問の傾向としては，図書の探し方，OPAC 検索の方法，資料のコピーや成果物の印刷方法に関するものが多かった。

通信図書周辺の閲覧スペースは人気が高く，PC やテキストを広げて勉強する姿が良く見られた。関連資料のある３階に滞在する学生が多かったが，それぞれ館内でお気に入りの場所を見つけているようで，同じ席で同じ方を見かけることが多かったように思う。

図書館の閲覧席は，集中して読書や学習ができるよう静かな環境を整えているが，JWU ラーニング・コモンズはお互いの意見を交換するなど発声してもよい学習環境として提供している。是非，スクーリング中に出会った仲間とともに活用していただければと思う。

夏期スクーリングが終了すると自宅での学習が中心となるが，図書館には学外から利用できるデータベースもあるので，今後の学習に役立ててほしい。

（館員･閲覧･西生田保存書庫係　南木香織）

編集後記　大河ドラマの和歌考証の一端をご寄稿くださったのは，桜楓会理事長としても桜楓会120周年記念式典等で大変ご多忙だった高野晴代先生。感謝申し上げます。田中先生の著作紹介の中の『ガールズ・アーバン・スタディーズ』は所蔵（図書館目白：361.78-Gar），興味ある方はこちらもどうぞ。心理学に興味はあるけど難しそうと思っている方には塩﨑先生のご著書を。川端先生のケルムスコットプレス刊本連載，ビアズリーの挿絵が実現していればと想像させられます。　2024年度編集委員：飯山智子，水嶋寿恵，南木香織（飯山）

日本女子大学図書館だより　No.181　2024.12.5　　ホームページ https://lib.jwu.ac.jp/lib/LP.html
日本女子大学図書館発行　〒112-8681　東京都文京区目白台２丁目８番１号　☎（03）5981-3195